

「開かれた都市・江戸」の特性と 平和の礎となった庶民のリテラシー

東京の観光振興を考える有識者会議 江戸の歴史・文化部会

令和6年7月19日
大石 学

250年以上に及ぶ平和の価値

- 17～19世紀後半の「江戸時代」に「江戸」を中心に展開した文化・文明が、今日の「和風」や「日本風」の源流
- その文化・文明は「徳川の平和 Pax Tokugawana」において生まれ、成長
- 世界史的視野でも、これだけ長期の平和は客観的・普遍的な価値を有する

フランス公使 レオン・ロッシュから
将軍徳川家茂への上書の一節

二百五十年の間、国内泰平にして
目に干戈を見さるの洪福を保てるは、
世界に聞たる例なき所なり



庶民による「平和」の自覚

- 全国規模での城下町の形成と武士の官僚化が、日本社会の平和を確立
- 庶民は平和の到来とその価値を自覚し、笑いとともに共有

(象徴的な落首・川柳)

- 米艦渡来 名にしおふ 大坂陣の まゝ なれば 錆たる つるぎ とぐよしもがな
- 御具足は 春と夏とに 見るばかり
- 太平の 矢狭間は 風も ぬけぬなり
- 泰平の 武者は 五月に 出るばかり
- 元和から 武器は 納まる 蔵の内
- 名将も 勇士も しれぬ ありがたさ
- 竹光は 御代に 目出度 道具なり
- 鎧持と 金持 違ふ 物でなし
- 人形屋 太平櫃へ 武者を入レ
- 泰平の 鎧は 虫が うらをかき
- 劔一が しちやを出ると 無刀也
- 御武徳は 具足をぬがせ 服をきせ

城下町建設と上水インフラの整備

- 家康は、関東入国（江戸打入り）の直後から築城と城下町建設を開始
- しかし、井戸水に海水が混じる状況

「一、城に水を掛るハ警衛之第一故、城を築には山水海浪によりて縄張いたし候事に承り伝へ候、然ルに江戸之御城は御本丸高く、都而土地低、水に潮汐さし、御城下に住る人の困り候」

「玉川上水紀元并野火留分水之訳書」（武蔵野文化協会『武蔵野』通巻285号、1978年）



- ✓ 急遽、江戸の西、多摩郡の井之頭からの神田上水を整備
- ✓ しかし水源が近く水勢・水量ともに江戸の発展に追いつかなくなったため、4代将軍家綱の時代に、遠く玉川から上水を開鑿し、江戸城と城下町への上水インフラを整備

“オープンシティ”であった江戸

関ヶ原の合戦後、江戸を中心とする新たな秩序が形成されるも、江戸は「首都機能」を有する権力都市でありつつも、権威の備わらない後進地

⇒ 250年以上続いた江戸時代を通じて京都など畿内諸都市の文化・文明を摂取し権威化

寺社の整備等

- 比叡山延暦寺に見立てて寛永寺を創建
- 琵琶湖を模して不忍池を整備
- 浅草に三十三間堂を建立
- 江戸城龍ノ口に高倉屋敷・伝奏屋敷を設け、京都の衣服・風俗の流入拠点に

人材の移動等

- 【宗教】僧（金地院崇伝、南海坊天海）
- 【芸能】能役者、歌舞伎役者、諸語り、人形師
- 【学問等】医師、儒学者、棋士
- 【産業】様々な職人、商人
- 【縁戚関係】公家から大名家への嫁入り

- 江戸は、全国260の大名家（藩）の江戸屋敷（藩邸）を通じた全国諸地域との交流を通じた要素の蓄積によって形成
- 藩邸は、政治・経済・文化の最新情報を国元に送るとともに、国元の情報やニーズを江戸に伝達

江戸は、歴史にも全国諸地域にも門戸を開いた「オープン・シティ」

江戸の庶民のリテラシー向上

- 長期にわたる平和を基礎から支えたのが、庶民の教育・リテラシー
- 平和な時代が訪れ、身分の上下なく文字を学ぶことが一般化
- 文官による統治のもと、庶民が自らの命を大切に暮らす儒学的価値観が普及

三浦浄心（1565～1644）
「慶長見聞集」より

聞しは昔、鎌倉の公方持氏公御他界(1439年、永享の乱)より東国乱、廿四五年以前迄、諸国におみて弓矢をとり治世ならず、是によつて其時代の人達は、手ならふ事やすからず、故に物書人はまれにありて、かゝぬ人多かりしに、今は国治り天下太平なれば、高きもいやしきも皆物を書たまへり、尤も筆道は是諸学のもとゝいへるなれば、誰か此道を学ばざらんや

源鳳卿（成島道筑）（1689～1760）
「東方農準竝農譚拾穂」より

一日本の風俗、戦国の余にうけて、人々武を貴び生死を軽ず、是経国の大瑾(きん)也、武士の外には用なき事なり、漢土には文武官を殊にす、官人といへども左文右武の道を分てり、乱に戡(かつ)(勝つ・殺す)は武、成を守るは文なり、民のごときは一生の慎謹、生をおしみ、子孫を思ふを第一とすべし、孝悌、忠信、礼楽の教、みな生を養ふの教なり、民生をおもんぜざれば、鬭争を好む

笑いとユーモアを伴う江戸庶民の教養

- 「徳川の平和」は、戦乱がなかっただけでなく、庶民の高いリテラシーと、命を大切に思う思想に支えられた文明
- その教育・教養が、笑いとユーモアを伴うものであったことは注目に値する

平和を自覚し、評価する狂歌・川柳（再掲）

- 米艦渡来 名にしおふ 大坂陣の まゝなれば 錆たるつるぎ とぐよしもがな
- 御具足は 春と夏とに 見るばかり
- 太平の 矢狭間は風も ぬけぬなり
- 泰平の 武者は五月に 出るばかり
- 元和から武器は納まる蔵の内
- 名将も 勇士もしれぬ ありがたさ
- 竹光は 御代に目出度 道具なり
- 鎧持と 金持違ふ 物でなし
- 人形屋 太平櫃へ 武者を入レ
- 泰平の 鎧は虫が うらをかき
- 劔一が しちやを出ると 無刀也
- 御武徳は 具足をぬがせ 服をきせ

文字についての高い教養を伺わせる川柳

- ・ 国の母 生れた文を 抱あるき
- ・ 雨やどり 額の文字を 能ゆぼへ
- ・ 物差で 雪をつつ突く 日記つけ
- ・ 引札は 指をなめ＼／ 斜(はす)に来る
- ・ うたゝ寝の 顔へ壺冊 屋根に葺き
- ・ 手紙には 狸臺には 鯉をのせ
- ・ 虫よけを 読みよく貼るは 無筆なり
- ・ 読めぬ字を 何といふ字に 読んで置(おき)
- ・ 品川の 客人偏の あるとなし
- ・ おやといふ 二字と無筆の 親はいひ
- ・ 川止(とめ)に 手にはを直す 旅日記
- ・ 通りぬけ 無用で通り 抜けが知れ
- ・ 鐵(かな)釘と めゝずと下女は 取り交わし
- ・ 看板を 見るなど味噌を 買(かひ)にやり
- ・ 寝て読んだ 文まんなかで 起き上り
- ・ 舟賃は 小遣い帳の 初手に付(つき)
- ・ 書出しで ぶちのめされた やうになり
- ・ 十の字の しりをまげると 嫁おぼえ
- ・ 風呂敷の 古筆で母を 思い出し
- ・ 客帳は けだし女郎の 秘書にして
- ・ 明の字が われて世界を 寐せおこし
- ・ 御加増の 加の字を馬の 上へ乗せ
- ・ 兵書だに まご子と読んで 笑はれる
- ・ 万の字も 書くにも一が はじめなり
- ・ 屏風に詩 聞けば主人も 相しらず
- ・ しんにうを 掛けて米屋の 子を尋ね
- ・ 魚へんに 交てはよせる かまぼこや
- ・ まつしまで かみをとちたす 旅日記
- ・ 不審紙 だらけな四書の 払物

古典や歴史、芸能等についての教養・関心を伺わせる川柳

奈良・平安時代

- ・ 古今集 貫之和歌の 道奉行
- ・ 須磨の浦 配所にしては いきな所
- ・ 九十九は 撰み一首は 考える
- ・ 物語 書く頃はまだ 藤式部

源平・鎌倉時代

- ・ 清盛の 医者は裸で 脈をとり
- ・ 佐野の馬 戸塚の坂で 二度倒れ
- ・ 飛車角の みんな成り込む 一の谷
- ・ 口へんに そら音で関を とをりぬけ
- ・ 生涯の 傷は弁慶 京言葉

南北朝時代

- ・ 正成は 鼻をふさひで 采を振り
- ・ 稲村が 崎で取れるは 太刀の魚
- ・ 足の利く 大将筑紫 迄逃げる

戦国時代

- ・ 三将で 思ひ\／の 時鳥
- ・ 四日目は 明智日陰の 守になり
- ・ 大将の 気性あらはす ほとゝぎす

朝鮮出兵

- ・ 日本勢 人参蔵で つかみやい
- ・ 耳を取る ころは軍も はなにつき

大坂の陣

- ・ 安康と 書いたで鐘も 釣し限り
- ・ 国家安 全と書かぬが 落度なり
- ・ 幸村は 生きる気でない 紋所
- ・ 幸村も 消へてなくなる 夏御陣
- ・ 大坂と 江戸で引張る 真田帯

慶安事件

- ・ もちつとの 事で鮎まで みな殺し
- ・ 篇のない 文字は慶安 四年なり

赤穂事件

- ・ 今時は 無いと出て来る 泉岳寺
- ・ あくる日は 夜討と知らず 煤を取り
- ・ 吉良びやかなるお寝巻が 炭だらけ
- ・ 雪の夜に 炭部屋わるい 隠れ所
- ・ 忠臣は 花の仇をば 雪でうち
- ・ 大石を 文鎮にする かな手本
- ・ 元禄に 建たる蔵は 朽ちぬなり
- ・ 明店が 四十七軒 暮に出来
- ・ 目かくしと かくれんぼする 由良と吉良
- ・ 一字でも 薄墨のない 仮名手本
- ・ いたむべし 四十七人 後家が出来

元禄社会

- ・ 芭蕉翁 ぼちやんといふと 立留り
- ・ 古池の ぼちやんが末世 迄ひゞき
- ・ 吉原を 丸でかつたは 文左衛門

文化期

- ・ 膝栗毛 はねて一九は おちをとり

市中

- ・ 講釈の 敵(かたき)は明日へ 逃のびて
- ・ かし本や 唐と日本を 脊負てくる

生活

- ・ おにが島 廻るじぶんに 子は寐つき

中国

- ・ 韓信に 意地の悪いは 屁を嗅がせ
- ・ 和藤内 一ツ家の義理は 欠き通し

旅芝居

- ・ 一ト村を 粹(すい)にして立つ 村芝居

村芝居

- ・ 旅芝居 目さへ寄せれば 落ちが来る
- ・ 勘平に 狩人の成る 村芝居
- ・ 勘平は おらがすべいと 村芝居
- ・ 打出しに 馬遣るべいと 村芝居
- ・ 村芝居 郷士のやうな 工藤出る
- ・ 割込みに 鍬を預かる 村芝居
- ・ 作がよく 出来たで当る 村芝居

浄瑠璃

- ・ 湯上(じょう)るり 着物を着ると けちな声

劇場・舞台

- ・ ちぐはぐの 顔は貰った 棧敷なり
- ・ 死にそうな そばに毛氈 出して有
- ・ 楽屋では 頼朝公の 部屋はなし

役者

- ・ 歌舞伎の 新参畜生 道へ落ち
- ・ 勘平は 麴町へも 折々出

講釈

- ・ 鉄炮を 扇ではなす 講釈師

大道芸

- ・ まき銭に になると神楽も 乱拍子

落語

著名な「千早ぶる 神代も聞かず 竜田川 からくれないに 水くくるとは」（在原業平）の本歌取り

- ・ 千早振 神代もきかず 淀川に 烏帽子着ながら 水くぐるとは
- ・ 千早振 神代もきかず 亀戸の 烏居のうへを 水くぐるとは

「開かれた都市・江戸」の特性

- 江戸は、参勤交代の武士、奉公人、旅行者などが全国から集まり、様々な文化・風習・言語が混ざり合う共生都市

江戸行きのためのマニュアル本として、方言と江戸語を対比した辞書も編纂

- 仙台藩の江戸藩邸の侍女が編纂したと言われる「仙台浜荻」
- 江戸生まれの久留米藩儒者が久留米滞在後、江戸藩邸に戻って編纂した「久留米はまおき」
- 16世紀以前の歴史的・地域的文化を集積し、また、17世紀以降の文化流入も許容しつつ、新たな文化を創造する開かれた都市
- 江戸は「居場所のある都市」であり、江戸を「公界」と呼ぶ資料も

- 権力都市として成立した江戸は「笑い・ユーモア」を伴う教育・リテラシーを基礎に、250年以上の「平和」を通じて京都・畿内など列島各地の歴史的・地域的な情報文化を摂取し、蓄積・洗練して全国に発信するというサイクルを繰り返した。
- 近代首都「東京」と近代国家「日本」は、この発展と達成の上に成立

今に残る江戸の歴史的遺産・文化財

江戸城

- 平和な江戸時代の城郭はほとんどが戦争を経験しない政治・行政施設
- 堀と緑に囲まれた江戸城はその構造がよく残っている。

大名屋敷・藩邸

- 全国260の大名の多くが上・中・下屋敷を構え、旗本屋敷とあわせて「国都の体」
- 近代以降、中央官庁や大学などに活用され、また、庭園を利用した公園として機能

寺社

- 浅草寺は江戸時代以前から信仰を集め、徳川家の祈願寺であるとともに庶民信仰の中心地
- 寛永寺・増上寺は徳川家菩提寺であると共に、周辺の寺院とあわせて大名・旗本の菩提寺
- 門前町が発達し、庶民の娯楽・行楽の場

神社

- 神田神社の神田祭と赤坂日枝神社の山王祭は、祭礼の神輿が将軍の上覧を受ける格式
- 湯島天神、亀戸天神、深川八幡宮など多くの神社に門前町が発達し、祭礼や開帳などを通じて信仰を集めた。

橋

- 日本橋は全国規模で新たに整備された五街道の起点として賑わった。
- 両国橋では出店や花火が催され、市民や旅人が食事やファッションを楽しむ場に

多様な文化等

- 歌舞伎、講談、落語、浮世絵など多様な文化が庶民の手で発展し、切絵図や番付などを通じて広まり江戸ライフを充実させた。
- 古くからの地名も江戸の発展を示す歴史資料